

NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

February 2008 vol.6



島根県芸術文化センター
SHIMANE ARTS CENTER
島根県立石見美術館
IWAMI ART MUSEUM

島根県立石見美術館ニューズレター

企画展「モダンガールズあらわる。昭和初期の美人画展」

モダンガールズ展・オススメ鑑賞法 ファッションで見る美人画

企画展「国立能楽堂開場25周年記念 国立能楽堂コレクション展 ～能の雅、狂言の妙～」

舞台芸術と美術館

「第22回現代日本彫刻展・字部ビエンナーレ」報告

島根県立石見美術館賞 山岡昇《地上の惑星…水》に決定!

6

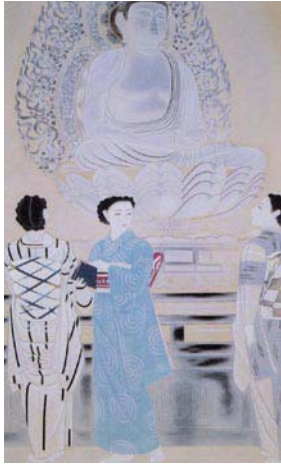


榎本千花俊《池畔春興》
昭和7年 当館蔵

「モダンガールズあらわる。昭和初期の美人画展」

2008年2月29日(金)～4月7日(月)

休館日:火曜日 開館時間:午後10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)



A



B



C

- A. 橋本明治《浄心》
昭和12年 京都市美術館蔵
- B. 田口 壮《喫茶室》
昭和9年 個人蔵
- C. 落合朗風《浴室》
昭和8年 東京国立近代美術館蔵

モダンガールズ展・オススメ鑑賞法 ファッションで見る美人画

このたびの企画は、ファッションを収集方針のひとつとして位置づけている当館が、館蔵品を核にしつつ全国の所蔵者から優品をお借りして開催する展覧会だ。展覧会の内容を簡単に説明すれば、「装いをテーマに、昭和初期に描かれた女性の絵を集めた展覧会」ということになる。

タイトルに含まれる「美人画」という言葉は定義が難しいのだが、女性を描いた絵を指し示す際に親しまれている言葉として、あえて使用した。出品作品には裸婦や前衛的な表現で描かれた女性など、「これが美人画なの?」と疑問に思われるであろう作品も含まれている。しかし逆にそこから、同じ女性の絵でも、「美人画」という名前がしっくりくるものと、そうでないものがあるのはなぜか、その違いはなにか、ということが見えてくると思う。

さて、美人画とよばれる作品において画家が心血を注ぎ、観る者が注目するのは女性の顔かたち、そして装いだ。装い、つまりファッションに注目して作品を見る場合、あなたならどんなところが気になるだろうか?

多くの人はまず、それがいつの時代の衣装かを考えるだろう。平安時代なのか、江戸時代なのか、近代なのか…。次に、その女性がどんな身分(職業)の人か、あるいは何をしているところかを考える。お屋敷でくつろぐ

令嬢なのか、芸妓なのか、農婦なのか…と。ここまで説明できれば、だいたいその絵が「分かった」気分になれる。

しかし時にはもう一步踏み込んで、「なぜその服を着ているのか(あるいは何も着ていないのか)?」という疑問を持つてみることも必要だろう。

「そんなことは画家かモデルにきかなきゃ分からない」、「服装に深い意味などないんじゃないか」という答えが返ってきそう。そうかもしれない。しかし、何度も女性の姿を描いている画家ならば、今度はどんな服装にしようかと考えを巡らせたはずだ。また、衣装に特に工夫をしなかった画家にも、その服装で描くことになった事情があるはずだ。そこには画家の個人的な事情や服装における流行だけでなく、当時の生活文化、世の中のムード、時には国際情勢が反映されていることがある。

今回あなたが展示室で気に入った絵があったなら、なぜ画家がその服装を選んだのか、描いた女性にどのような印象をもたせたかったのかを考えてみてほしい。なんとなく見ていた時には気がつかなかったことが、見えてくるかもしれない。

ところで今回の展覧会の主役は、大正末から昭和初期にかけて都市部で流行の

装いをした、モダンガールとよばれた女性たちだ。描かれたモダンガールたちの姿は華やかで、見ているととても楽しい。しかし実際のモダンガールたちは、洋装がヘタだとか、軽薄だとか、浪費家だとか、様々な批判を浴びせられていた。なぜ彼女たちは批判を浴びるような服装をしたのだろうか?あるいはなぜ世間はその服装を非難したのだろうか?

女性の中には外に出て働くために便利な洋服を選んだ者もいた。資産家の妻や娘なら社交のために装う必要があっただろう。あるいは産業界が次々と発信する新しいファッション情報を見て「私もこうなりたい」と願い、一生懸命働いた稼ぎで洋服を手に入れた者もいただろう。装う側の事情は様々だが、非難した側の本音をつきつめると、だいたい「女性は上品に装い、しとやかに振る舞うべし」というところに行き着く。洋装を批判した人たちは、どうやら和服こそが日本女性のあるべき装いだと考えていたようである。

ところで今のジャーナリズムの報道を思いおこしてみると、若い女性のファッションに物申す姿勢が80年前と全く変わっていないように見えるのだが、いかがだろうか。



図1



図2



図3

図1.《茶地青海波源氏車模様厚板》 江戸時代18世紀 国立能楽堂蔵

図2.《萌黄地卍唐花模様袷法被》 江戸時代19世紀 国立能楽堂蔵

図3.《小面》 国立能楽堂蔵

舞台芸術と美術館

今回の展覧会は、国立能楽堂の開場25周年を記念して、国立能楽堂が20年以上にわたり収集してきた能装束、能面、狂言装束、狂言面、楽器、作り物、謡本それに能や狂言を描いた絵画など貴重な資料を一堂に展示するものである。この展覧会を開催するにあたって、美術館に勤務するものとしていくつか考えた。

能楽は日本が世界に誇るべき芸能ではあるが、一般の方々にどこまで馴染みがあるのだろうか。確かに能・狂言という言葉は、少なくとも成人以上の日本人であれば聞いて知っている言葉である。しかし、テレビをつけても能楽は滅多に放送されない。どんなに内容が良くとも、入館者数が少なければ興行としてはある意味失敗である。展覧会を永年やってきた当方としては、そういったリスクに悲しいかな敏感に反応してしまう。

また、能楽はあくまで舞台芸術である。動きと音が伴ってこそその芸術である。そういうものを動きも音もない展示室という空間に閉じこめてしまっただけではたして良いのだろうか。どんなに素晴らしい装束も演者が身につけ、動いてこそ美しいのであって、装束を衣箱にかけて見せることにどれだけの意味があるのだろうか。

前者の疑問に対しては、最近の静かな

古典ブームが後押ししてくれた。能楽・歌舞伎・文楽・古典落語などのチケット販売が一部で好調と聞く。実際当館のある島根県芸術文化センター「グラントワ」で開館直後に中庭で開催した薪能は、チケットが完売した。今回の企画は、いわゆる古典芸能ファンから切望されている内容ではないか。また、公演を見たことはないが、興味を持っている方々にとっては展覧会が案内役を務めてくれるのではないかと。たとえ入館者数が爆発的に多くなくても開催する意義があるのではなかろうか。

後者の疑問に対しては、美術館の可能性から考えた。本来舞台上で演者が身につけるべき装束が、動きも音もない展示室に置かれるのであるが、展示する側は展示手法や照明に全神経を使い、見る側は装束そのものの美しさに集中することができる。また、普段は舞台上で決して一緒にならない装束を比較して見ることも可能である。能面なども同様である。

能楽は、歌舞伎などと異なりいわゆる大道具は用いない。しかし、山・家・井戸・船などがどうしても必要な場合は、「作り物」と言われる簡単なセットを使用する。例えば船は、船の骨格を竹で造り、それに白い布を巻き付けただけである。それは船と呼ぶにはあ

まりに抽象的で、むしろ記号に近い。そういう演者と観客との間の共通の決まり事が古典芸能の分かり難さの遠因になっているのだろうが、そのような決まり事にスポットをあてて展示することも可能である。

今回は能楽の展覧会にあわせて、島根県立古代出雲歴史博物館の全面的な協力を得て「島根の室町文化展」も開催する。室町時代に制作された能面を含む絵画・彫刻・工芸を展示する。能楽が確立した時代に制作された作品の中に身を置き、室町時代を言葉ではなく、感覚的に味わうことも可能である。これは舞台では決して味わえない体験である。

美術館は美術館の可能性を信じて、舞台とは全く違うアプローチで、能楽を表現すれば良いのかもしれない。舞台では見ることの出来ない能楽の一面を美術館で発見していただければ、この企画は成功である。

※註 「島根の室町文化展」は4月23日(水)～6月23日(月)に島根県立石見美術館で開催される。

島根県立石見美術館賞 山岡 昇《地上の惑星…水》に決定!

現代日本彫刻展・宇部ビエンナーレは、山口県宇部市常盤公園で隔年開催されている公募の野外彫刻展です。この展覧会は、宇部の市民運動と結びつき、1961年に日本初の大規模な彫刻の公募展「宇部市野外彫刻展」として出発。その後、展覧会の名称を変えながら通算46年の長きにわたり、国内外の野外彫刻を牽引する展覧会へと発展し、今では世界に《彫刻のまちUBE》の名を知らしめています。ちなみに、当館の館長である澄川喜一も、名称が変わった1965年の第一回現代日本彫刻展に出品(当時31歳)。その後1979年の第8回展に《そりのあるかたち》で「宇部市野外彫刻美術館賞」を、第9回展で「毎日新聞社賞」を受賞しています。現代日本の彫刻家で大家と呼ばれる作家たちは、皆30代～50代の若き日々、この展覧会で力量を競いあっているのです。

このように多くの彫刻家を成長させた宇部ビエンナーレですが、今回の第22回展(会期:2007年9月29日～11月11日)は国際展として公募を行い、世界36カ国から378点の模型作品が応募されました。その

中から入選が37点選出され、さらに実物制作を依頼されるのは15点に絞られます。完成した作品は、期間中常盤公園内に展示された後、数点が宇部市内の各所へ設置されていきます。ですので、宇部は街を歩けば気軽に彫刻を鑑賞できるステキな街になっているのです。ここにこの展覧会が、街づくりの一端を担っていることもうかがえます。

今回から新たに賞へ加わったのが「島根県立石見美術館賞」です。近隣にある美術館としては、宇部市野外彫刻美術館賞、山口県立美術館賞に続いて3館目の賞となります。この記念すべき第1回目の島根県立石見美術館賞は、山岡昇氏の《地上の惑星…水》に決定いたしました。山岡氏は1964年生まれ、大阪府堺市出身。これまでも数々の彫刻展に出品しています。2003年の第20回展でも《BLOOMS IN THE WATER … TO VIBRATION》という作品が入選。今回二度目の出品で受賞となりました。受賞作品の「地上の惑星…水」(写真)は、鏡のようにピカピカに磨き上げられたステンレスの丸い円盤が、4本の円柱でつながれ、しかもその円柱に触れて上下に動

かす事で円上のレールの上を転がるよう設計されています。作品は周りの風景を写し込み、作品が動けば風景も動きます。作者の山岡氏は、円盤を惑星に、4本の円柱を惑星が引き合う引力にと、宇宙の法則を作品に込めているかのようです。この作品は直接触れて動かすのも楽しいのですが、少し離れたところから、人が動かしているのを見ているとまた楽しく、写り込んだ風景が重たいはずの金属を軽やかに見せてくれます。

この作品は小さな子供たちにも大人気で、大きな惑星を取り囲む小惑星のように、常に作品の周りには子供たちの姿が見られました。山岡氏を含む作品は、今回「緑と花と彫刻の博物館(ときわミュージアム)」がオープンしたことから、平成21年3月頃まで他の作品と併せて継続展示されています。皆さんもこの機会に《彫刻のまちUBE》へ是非足を運んでみてください。

■宇部ビエンナーレへのお問い合わせ
宇部市教育委員会彫刻推進室 TEL: 0836-34-8615

(真住貴子 当館主任学芸員)



山岡氏の作品に触れて楽しむ子供たち

以下のとおり訂正してお詫びします。

前号「島根県立石見美術館ニューズレターvol.5」p3 「レンブラントとモダン・アートのコレクション」本文中7-8行目誤「重要文化財の光琳の屏風」→正「重要文化財の等伯の屏風」